



ブランクーシの横断的鑑賞

—— 東海圏美術館のコレクションより

『アートベーパー』89号の特集記事「不思議な出会い。三つの作品をめぐって」において、当館で収蔵した3点のメキシコに関連する作品が、後で調べてみると1人の女性と深いつながりを持っていることがわかった、という作品にまつわる「縁」を紹介しました。今回の特集は、当館と近隣的美術館の各コレクションを見比べた時に、似たようなつながりが発見できないだろうか、という試みです。当然のことながら、荻須高德や中村正義など、郷土ゆかりの作家の作品は東海圏の各美術館に散らばって収蔵されていますので、それぞれを比較しながら、あるいは体系づけながら鑑賞すれば、なんらかの関連性を発見するのは容易だと言えますし、そのような鑑賞方法はたいへん有意義でしょう。それでは、作品が流通しづらい海外の物故作家の場合はどうでしょうか。たとえば絶対数の少ないモディリアーニによる油彩の《カリアティード》が、

2 kmも離れていない愛知県美術館と当館の双方にあるというのは、やはりなにか「縁」のようなものを感じてしまいます。ですが、今回はモディリアーニではなく、その友人の彫刻家・ブランクーシをとりあげたいと思います。結論を先取りすると、東海圏の美術館を巡れば、ブランクーシの最初期(1905年)から、当館所蔵の《うぶごえ》(1917年)に至るまでの、人物彫刻の抽象化の過程を辿ることができる、ということになります。特に《うぶごえ》に関しては、そのディテールやタイトルに先行作品のなごりをとどめているので、作品の成立過程を知ることが鑑賞の一助となります。

光ミュージアム所蔵の《プライド》(1905年)
「抽象彫刻の父」とも呼ばれるだけに、日本各地の美術館が収集してきたブランクーシの作品は抽象がほとんどです。ブランクーシによる具象彫刻は初期に制作されたものが一部

明日を呼ぶ私の記憶

80年代を振り返って ①

美術評論家 中村 英樹

1980年代に入ると、美術を巡る時代状況は大きく変わった。60～70年代のコンセプチュアル・アートやミニマル・アート、日本の「もの派」などに代わって、ニュー・ペインティングと呼ばれるような傾向が広がった。自らの作為を自己言及的に見つめ直し、自己抑制制的になっていった60～70年代の文脈が論理的整合性をもって次に引き継がれて展開されるのではなく、まったく別の文脈への飛躍が起こった。

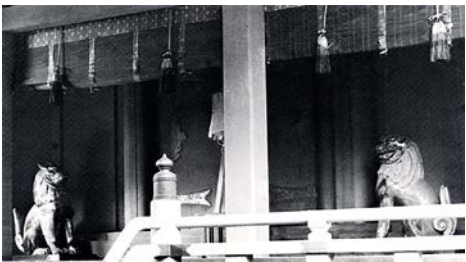
そんな状況下の1984年に、私は初めての著書2冊を同時に出版した。『鮮烈なる断片—日本の深層と創作現場の接点』と『日本美術の基軸—現代の批評的視点から』（ともに杉山書店）である。前者は、雑誌「いけばな龍生」に82年5月号から83年5月号まで連載した記事をまとめた本で、日本古来の文化遺産と80年代当時のいわゆる現代美術が対比されている。後者は、前回記した拙稿「芸術・人間・宇宙」第1部・第2部に続く、第4部として書いた論文を独立させた本で、縄文土器から各時代の絵画・彫刻、桂離宮までを現代の目で構造分析したものである。

欧米の直接的な影響下にある60～70年代美術の自己抑制的な行き詰まりを超えるには、西欧近代の「自我」という主体の在り方に基づく美術の文脈を相対化して、新しい主体の在り方を拠りどころとすることが肝要で

ある。日本古来の文化遺産の精神構造の意識化と、日本現代美術に潜む自国の文化的遺伝子の顕在化がそのために有効に働く。形式化した日本の伝統に留まるのではなく、未知なる日本の深層をこれからの美術の手掛かりにしたい。それが当時の私の思いであった。

二つの実例を挙げよう。『鮮烈なる断片』の冒頭に「愛知県・津島神社本殿の狛犬」と「三重県・二見ヶ浦の夫婦岩」が登場する。左右二体の狛犬は、その〈あいだ〉の見えないご神体を暗示し、夫婦岩のしめ縄は、二つの岩の〈あいだ〉の無限の彼方を感じさせる。〈あいだ〉の直視は、欧米にはない日本文化の特色である。後年、それに関するドイツ・バウハウス大学での私の講演を聴いてから来日した女性の教授がわざわざ二見ヶ浦を訪れた。

ところで、当初、若年の私には出版してくれる版元の当てがまったくなかった。そこで東京・神田神保町辺りを歩き回り、思い切ってある個人経営の出版社に飛び込み、直談判した。それが杉山書店である。この出版が以後の私にとって重要な意味を持った。小さな勇気が私の人生の大きな方向づけをすることになった。



掲載写真：「愛知県・津島神社本殿の狛犬」

時の話題

名古屋も梅雨入りしました。晴天つづきの5月の暑さは一足飛びに夏の到来を思わせるものがありましたが、6月になり例年通りの湿った空気を感じるこの頃です。白川公園の樹々も淡かった新緑の色合いを日々深め、煙る水蒸気に艶やかな姿を見せています。

今年度最初の特別展「若林奮 飛葉と振動」が立ち上がり会場の名古屋展を終えて、次会場へと引き継がれました。来年6月までつづくこの展覧会、皆様とどのような出会いをし

ていくのでしょうか。

ブログでも話題にしましたが、若林展に
 係して「ユリノキ」を取り上げます。若林の作
 品には植物が良く出てきます。ユリノキもそ
 のひとつです。

私には名古屋でユリノキを見た記憶がありません。見たのはすべて東京です。ユリノキは北アメリカ中部原産。日本には明治時代の初めに持ち込まれました。学名Liriodendron tulipiferaで、モクレン科のユリノキ属の落葉高木です。「tulipifera」は「チューリップのような花をつける」という意味。5～6月は、ちょうど花の時期にあたります。

名古屋出身の詩人で文化史関係の著述も多

残るだけで、あまり目にする機会がありません。昨年、高山市の光ミュージアムが収蔵した《プライド》はその意味で貴重な作例で、ブランクーシがまだパリの国立美術学校の学生だった時に制作された、写実的な若い女性の胸像です。一見するとスタンダードな肖像彫刻のようですが、モデルは特定されていません。女性は正面を見据えており、ポーズにはひねりや傾きがなく安定感があります。ただし、作品の一部、右肩にかかる髪の毛には、わざと未完成な状態で留めてあるような曖昧な部分が見て取れます。これは当時、斬新な彫刻を次々と世に送り出していたオーギュスト・ロダンやメダルド・ロッシが好んで用いていた表現方法でした。ブランクーシはこの《プライド》に流行をさりげなく取り入れることで、保守から革新への第一歩を(やや控えめに)踏み出した、と見る事ができますでしょう。《プライド》はまず石膏像として作られ、1905年のサロン・ドートンヌに入選しました。そうした結果に満足だったのか、その後ブランクーシは《プライド》をブロンズで鋳造しましたが、これは現在知りうる限りにおいて、ブランクーシにおける最初のブロンズの作例ということになります。

豊田市美術館所蔵の《眠る幼児》(1907年)
 ブランクーシは1907年に彫刻の革新への歩みを速め、以後彫刻の抽象化に邁進していきます。ブランクーシの友人・ポヤーナ夫妻の娘アリスをモデルにしたといわれる《眠る幼

い春山行夫(1902-1994)の著作に『花ことは』(平凡社ライブラリー、1996年、上下巻)があり、そこにもユリノキが取り上げられています。春山がはじめてユリノキを見たのも、上京してからです。小石川植物園、新宿御苑、東京国立博物館と、今日でも変わらずユリノキの見られる場所を書き、赤坂離宮前の並木や桜田門から日々谷交差点にでる大通りの二重並木の外側にユリノキが植わっているのを発見して、東京には意外にユリノキの多いことに気がついたと記しています。小石川では、「明治九年(1876)に輸入した最も古い樹で、明治十九年に大正天皇が皇太子のとき見学にこられて、ユリノキと命名された」と立札がでていたとあります。

児)は、こどもの自然な外見(具象性)を保ちながら、しかし表面は滑らかに整えられておらず、細かな凹凸や粗野な粘土の質感が残っています。先に挙げたロダンやロッソが作る彫刻は、時に「印象派的な」彫刻と呼ばれており、光(と影)がもたらす効果および雰囲気重視された結果、絵画の場合と同じように、明瞭さよりもぼんやりとした表現をとり、作者のタッチを強調したような波打つ表面をもつ傾向がありました。《眠る幼児》には、過度ではありませんが、《プライド》よりは明らかに、当時の「印象派的な」彫刻が意識されてい

記念樹や街路樹には時代や地域によって違いや変化がありますが、春山の記述からユリノキが日本の西洋化と深く関わっていることに気づかされます。ユリノキは、今、東京国立博物館のシンボルツリーとなっていますが、「文明開化」を象徴するもののひとつだったのでしょう。

若林の自宅の庭には、知人からもらい受けたユリノキがありました。若林がユリノキにどのような思いを抱いていたのかは、私には分かりません。

春山によれば、「あなたは私を幸福にすることをしてくれている(待ちかねている)」(仏)が、ユリノキの花ことばです。(み。)

ます。そして、ブランクーシはここでさらに大胆な試みをしました。肖像彫刻の頭部をいわば生首にして、しかも台座の上に垂直に立たせて固定するのではなく、台の上にごろんと横たえた状態で提示したのです。「眠り」を「人間(の頭部)が重力に屈している状態」と解釈した結果、重力(重さ)を眠りの深さの暗喩とすることに成功しています。ですから、豊田市美術館の《眠る幼児》の素材がブロンズであるということは特別な意味をもつと思います。

ブランクーシは《眠る幼児》の発想が気に入ったのか、それ以降《眠るミューズ》(1910年)や《プロメテウス》(1911年)など、卵型や球形をした頭部のみの作品をいくつも制作しました。それらは顔の細部が著しく省略・単純化されており、写実性が残る《眠る幼児》の作風とは大きく隔たったものになりました。

メナード美術館所蔵の《スタンディング・ボーイ》(1913年頃)

1905年から1912年の間に、こどもの頭部や胸像を多く作ってきたブランクーシは、今度はこどもの全身像を制作することを思い立ちます。初めての木彫作品となった《最初の一步》(1913年)は、泣きながら、おぼつかない足取りで前に進もうとしている赤ん坊の姿を、大胆に抽象化・単純化して表現しています。(作品は挿図《291ギャラリーのブランクーシ展》の中央に写っています。)洗練されているというよりも原始的に見える形態は、胴長短足のプロポジションにしても、「く」の字に屈曲する両足にしても、明らかにアフリカ彫刻の影響下にあります。興味深いことに、こんなにも写実性から離れた作品であるにもかかわらず、この赤ん坊にはモデルがいるという説があります。それはブランクーシの友人だったファーカー夫妻の息子ジョージ(1910年11月10日生まれ)で、ブランクーシは立っているジョージの後姿を「写實的に」描きとめ、そのドローイングの裏面に“The First

Step”(最初の一步)と書き残しました*1。(また、ジョージとブランクーシが一緒に写っている写真も知られています)。タイトルが一致することなどから、木彫の《最初の一步》はジョージからインスピレーションを得て制作されたと考えられているわけですが、それにしても生身の赤ん坊の立ち姿とこの木彫の形態にはずいぶんと隔たりがあります。

人体の抽象化、単純かつ本質的な形態を探っていく中で描かれたドローイングの貴重な一枚が、メナード美術館所蔵の《スタンディング・ボーイ》だと考えられます。将来的にこの構想が木彫として実現することを意識してか、ブランクーシはこのこどもの肌の色を赤味がかったライトブラウンで着色しており、瓜のような形の胴体には木目を彷彿とさせる縦の筆跡を残しています。目(あるいは眉)と鼻梁は一続きの弧線、口は台形の凹みで表現し、泣き声をあげるこどもの顔の特徴をつかんで、この上ないほど単純化しています。こどもの右手は顔の前にかかっており、涙をぬぐっているような仕草に見えます。タイトルは「スタンディング・ボーイ」ですが、このドローイングのねらいは、立ち姿以上にこどもが泣いている様子のエッセンスをつかむことにあったようです。ちなみに、性別がわからないほど単純化されているのに「ボーイ」と呼ばれているのが不思議でしたが、これは着想源がジョージであったことのなごりなのかもしれません。

名古屋市美術館所蔵の《うぶごえ》(1917年)

1914年3月12日から4月1日まで、ブランクーシ初の個展がニューヨークのザ・ギャラリー・オブ・フォト・セセッション(通称“291”ギャラリー、写真家のアルフレッド・スティーグリッツが主宰)で開かれました。そこには8点の彫刻が出品され、その中に木彫の《最初の一步》も含まれていました。(ブランクーシの意向で、その時には「放蕩息子」というタ

イトルに変更されています)。残念ながら言うべきか、《最初の一步》は買い手がつかず、パリのブランクーシのもとへ戻ることになりましたが、このことが作品の運命を大きく左右します。ブランクーシは《最初の一步》の頭部だけを残すことを決断し、胴体部分を破棄してしまったのです。残された頭部は、破片や部位としてではなく、《こどもの頭部》という独立した作品として扱われることになりました。そして《眠る幼児》で試みて以来、ブランクーシの常套手段となった、「生首を横に寝かせて台の上に直置きする」という方法で展示されることになります。

この木製の《こどもの頭部》から型を取り、ブランクーシは3つの石膏像を制作しました。さらに1点のセメント像、3点のブロンズ像*2も制作し、これらの派生作品にはブランクーシの存命中に“The First Cry”(うぶごえ)という名が与えられました。つまり、もともと全身像だったときのタイトル“The First Step”(最初の一步)をもじった名前がつけられたのです。かつての姿のなごりは、当館が所蔵するブロンズの《うぶごえ》の裏側(後頭部)にも見つけることができます。長さ17cm、幅5.5cmにわたって、木を剥いだ跡のように見える粗い縦筋が研磨されずに残っているのです。ほとんどの表面は綿密に研磨されているので、この箇所だけ粗野なまま残すということに、ブランクーシがなんらかの意図をもっていたのは明白です。かつてここに首が接合されていて、それを引き剥がした跡がそのまま残っているのだとすれば面白いのですが、そこまでは断定できません。首の位

感想ノートから

若林奮 飛葉と振動

2015年4月18日(土)～5月24日(日)

内省を誘う若林奮の創作は、感想を書き記す行為にはそぐわないもののなのかもしれません。この展覧会、いつになくお客様の滞在時間が長く、監視のスタッフなどによれば2～3時間は珍しくなく、なかには5時間超の方もおられたようです。出品点数も多く、一通りご覧いただくだけでも身体的に疲れてしまうのに、若林の作品は分かりやすいものではないため、精神的にも疲れてしまった方が多いのではないかと思います。その疲れが、ある種の満足感を伴うものであれば、申し訳ないと思う半面、担当者としては嬉しくもあるのですが、はたして実際のところはどうだったのでしょうか。

感想は、あまり書き残されていないのですが、記してくださった皆様の感想からは、率直な思いが伝わってきます。そのいくつかをご紹介します。ご紹介できないものを含めて、感想をお寄せいただいた皆様、ありがとうございました。

す。一体、どこからどこまでが「アート」なのか、そして「クラフト」は「工芸」とどう違うのか。このあたりは、議論の分かれるところでもあり、また、いろいろ考えを巡らす対象ともなり得るものでしょう。この展覧会では、そのあたりを曖昧なままに提示し、鑑賞するみなさんに「アートとは?」「クラフトとは?」と考えていただければと思います。また、ひとつ言えることとして、「アート」と「クラフト」は、対等であるということがあります。少なくともこの展覧会では、そういった立場で両者をとらえてみたいと思っています。

NO IMAGE AVAILABLE

アルフレッド・スティーグリッツ(1864―1946)《291ギャラリーのブランクーシ展》1914年
プラチナム・プリント 19.3×24.4cm ニューヨーク近代美術館(MoMA)蔵
Gift of Charles Sheeler. Acc. n.: 630.1914.

NO IMAGE AVAILABLE

コンスタンティン・ブランクーシ《うぶごえ》1917年(鑄造1984年)
ブロンズ 17.0×26.0×18.0cm 名古屋市美術館蔵

置に関係なく、単にもとの木材にこのようなテクスチャがついていただけなのかもしれません。いずれにせよ、金色のブロンズに形を移し替えても、ブランクーシはもとの状態の「木の記憶」は消さずにとどめておいた、ということはできると思います。(nori)

*1 Constantin Brancusi, *The First Step*, c.1912, oil on cardboard, The Art Institute of Chicago.
*2 当館所蔵の《うぶごえ》は、ブランクーシの死後に鑄造されたもので、この3点のブロンズの中には含まれません。

「緑、青、水彩のドローイングが大好きです。見ごたえのある展覧会でした。」

「『美』というよりは『設計』『調査』『思考』のような、別の分野の開拓者のように思える貴重な作家の展覧会でした。庭の設計にも着目したドローイングと映像、写真、模型の数々は彼の思考を探るとてもよい参考になったと思います。作品そのものもそうですが、作家の足跡をたどるという意味でも充実した展示でした。」

「いつも『美』と『いやし』を求めて美術館に行きますが、今回はまた違ったものを見られました。空気の中にある緑色の物質…想像力が凄いと思いました。理解しにくい作品もありましたが、みる側も色々考えることができ、面白かったです。」

「数年前に若林奮のことを知り、もっと早く、生前から知っていれば新しく作品が生まれていくのをリアルタイムで見られたかも、と思っていました。次に展示が行われるのもきっともっと先のことだろうとあきらめ気味でしたが、自分が思っていたよりも早くに機会があってとても嬉しいです。アッサンブラージュ的手法の作品が好きなので、見てずっと興奮していました。私も大学で彫刻を制作しており、今回の展示を見たことで良い影響を受けられたら良いなと思っています。とても満足した展覧会でした。」(み。)

出品作家は、稲葉佳子、徳田吉美、中谷ゆうこ、Kim Hono、水谷一子、水野誠子、米山和子の7名。ファイバーアート、陶器、ワイヤーアートやジュエリーなど、さまざまな作品が並びます。現在、各作家の展示場所も決まり、それぞれの作家が制作を始めているところです。「アート」と「クラフト」のコラボレーションによって、いままでにない新鮮な空間が生み出されることを期待していますし、私達美術館スタッフもそのために尽力したいと思っています。ぜひ、展覧会に足をお運びください。(AN)

展覧会の舞台裏

広報4

パソコンやスマートフォンといったデジタル・ツール全盛の昨今ですが、美術館の広報は、いまだにポスターやチラシといった紙に印刷されたアナログ媒体が主役です。もちろん美術館もホームページはありますし、職員によるブログも公開されていますが、まだまだ認知度も利用度も低いようです。展覧会ごとに行っているアンケートを見ても、「何を通じてこの展覧会を知ったのか?」という問いに対し、新聞やテレビと並んで、あるいはそれ以上の割合で、ポスター、チラシを見て知る方が多いというのが現状です。パソコンやスマホといったツールは、使用する側がある目的をもって利用すれば大変便利なものですが、使用者にとって未知のテーマは、当然のことながらアプローチのしようがありません。つまり、そもそも普段から美術に関して気にかけているコアなファンを除くと、情報伝達の可能性はほぼゼロということになります。美術館に勤務しているものがこう言うのもなんですが、そもそも美術はそれほど多くの人々に開かれた表現手段とは言い難い側面があります。一般の方々がご存知の画家や彫刻家の名前は、かなり限られた数になるでしょう。つまり、美術館で取り上げる大半の作家やグループについて、一般の方はご存じない。ご存知なければ、当然その情報に対して積極的なアプローチを期待する方が無理なわけで、

展覧会 現在進行形

「ポジション2016 アートとクラフトの蜜月」

来年の話になりますが、2016年お正月明けの1月5日から2月21日まで、「ポジション2016 アートとクラフトの蜜月」を開催します。「ポジション」展は、この地方で活躍するアーティストを紹介するもので、今回が5回目の開催になりますが、今回はこれまでとは

少し趣向を変え、クラフトの分野も紹介することになりました。といっても、タイトルにあるように「アートとクラフトの蜜月」ということですから、アートとクラフトが融合した作品や、アートとクラフトが密接に関わっていることを感じさせるような作品が展示されることとなります。両者がお互いの境界を越えることによって、豊かな世界を作り出す、それを名古屋市美術館の展示室で実現させようというわけです。

「アート」という言葉、そして「クラフト」という言葉には、どちらも曖昧な要素がありま

郷土の作家たち

中谷 泰(なかに たい／1909－1993)

1909(明治42)年、現在の三重県松阪市に生まれる。本名、泰一。商業学校を退学後、友人とグループで油絵研究を行い、上京後は川端画学校でデッサンを学ぶなどした。正規の美術教育を受ける機会はなかったが、第8回春陽会展に《街かど》が初入選。翌年、春陽会洋画研究所に入り、出征を挟みながらも着実に出品・入選を重ね、1939年第3回文展で《秋日》が特選。1942年研究所の移転を機に退き、木村荘八に師事する。戦後は新たに起こった美術運動の仲間たちと各地へ写生に出向き、炭坑町の佇まいや背後のボタ山に強く惹かれ、頻繁に作品に取り上げるようになる。同行の仲間には佐藤忠良、朝倉摂らがいた。1971年1月から77年3月までは東京藝術大学美術学部教授として後進の指導にも携わった。《陶土》に見られるような採掘場の風景を描いた作品で知られるが、題材に魅力を感じただけでなく、油絵具を用いて表現するのに適しているか否かに重点を置いて題材を探し求めた結果だと本人が語っている。戦後間もない時期に絵具の検査員を経験し、画材の知識を学んだことがこのような視点を得る契機に

どこがおもしろい?!

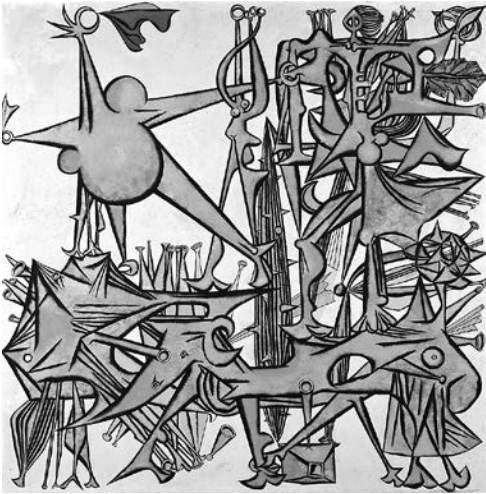
今回は約1年前、2014年4月から8月末にかけて展示した、三上誠の《アクロバットショウ》に寄せられたご意見をご紹介します。

「目がいくつあっても足りない!と思うような、色んな部分を一気に見なくなる忙しい絵だと感じました。」(匿名、?歳)
「つままれたり、つまんだり、足なのか手なのか、おっぱいなのかおしりなのか分からないけど、ハンカチと葉っぱだけよく分かりました。」(詩織さん、28歳)
「それぞれの物体は人の形を全く成していない。それにも関わらず、直感で人間を見出してしまう。すごい。」(池田さん、21歳)
「画面左上の部分にひとりの人がいて、L字型に密集してる部分からハンカチをヒラヒラさせて『さようならっ!!私は先に行かせてもらおうっ!!』と言ってるように感じた。」(匿名、?歳)
「機械が人のように自由に動いて、サーカスのアクロバット・ショーをしている感じがします。ハンカチをつまんで振っている機械も!でも、もしかして人が機械のようになってショー(人生)をやらされているのかも?」(クーケーさん、51歳)
「やわらかい曲線が、ギスギスした心(神経)に、ほんの少しの休息、落ち着き、和みを分け与えてくれた気がする。この日昼過ぎ、TVニュースで組み体操をやるかやらないかのテーマで討論をやっていた。」(後でアートさん、36歳)
「せんそうにいつてるようにみえる、ふしぎな作品だと思います。でも、せんそうにしては、サーカスのようにもみえます。せんそうはウマでいくと思いますがヤギをつれていつてるようにもみえます。人間が星の形をしていたり、三上誠さんはおもしろい、だれもが思いつかないことを考えたんだと思います。こせいてきな作品なのでみあきません。」(柑奈さん、8歳)
「一見乱雑に配置されているかのようで、すべての部品がいずれかの部分で接合して1つの集合体を形づくっている。みればみるほど各パーツの接合点が自然で美しい。いつの日か、有機化合物の高分子でも、このように自己集合するような設計をしたい。」(化学者さん、心は18歳)
「右上の髪をなびかせている人物は宣教師。その下、体で宣教師を支えて持ち上げている丸顔の弟子。左の人物は、それをベテン師となじる政治家。その足の下で大衆が口々に好き勝手なことを口を尖らせて叫んでいる。そんな風に私は感じた。」(村瀬さん、42歳)
「たくさんの人が自分の身体を筆にして空中

なったと考えられる。静物画のほか、画家自身を含めた身近な人物画を長い画業の中で度々題材に取り上げているが、50年代の人物画が当時盛んだったルポルタージュ絵画の影響を受けて社会的なメッセージの発信に腐心したのに対し、70年代以降は純粋な人物画としての表現へと重点が移行している。また自身の妻子や炭鉱や漁村、田畑で働く労働者を描いた作品は、モデルに対する慈愛や共感などの情感に満ちておりヒューマニストとしての側面を覗かせる。生きる上での描くことの意味や表現手段が油彩であることの意味、その時々自身の関心の在り処と誠実に向き合い、時間をかけて小さな確信を一つひとつ積み重ねるように制作した。芸術家や画家よりも“絵かき”と称することを好んだ。(3)



中谷泰《陶土》1960年



三上誠《アクロバットショウ》

に線を描いているようです。ゆっくり慎重に描かれた線もあれば、迷路のようにすきまを見つけて伸びていく線もあります。しかし一番多いのは下絵を正解になぞっていくような線です。そこからずれると線が切れてしまうような緊張を感じます。」(梅子さん、55歳)
「《アクロバットショウ》というタイトルだが、みんながつながり、誰かの足が、誰かにひっかかり、たおれ、それによりまた誰かが転ぶ、というような一種のコメディーのような印象を受けた。アクロバット→緊張、コメディー→弛緩が一緒にあるようなおもしろさを感じました。」(トイダさん、?歳)
「訳のわからない、こみあった感じが自分のようだ。もっとスッキリしろよ…みたいな。考えすぎだよ君…みたいな。今日は遠足です。」(匿名、22歳)

三上誠(1919－1972)は、戦後まもない京都において日本画壇革新に挑んだ画家です。京都市立絵画専門学校(現・京都市立芸術大学)の日本画専攻を卒業し、一時期は写実的な作品を描いていたものの、1948年に「パンリアル」を結成してからは画壇の伝統や風習に反発し、従来の日本画の枠にとらわれない表現方法を模索しました。《アクロバットショウ》が制作された1957年前後は、人体を大胆にデフォルメした形態を輪郭線で囲い、ところどころハッチングや油性ペンを用いて黒く太く強調させながら描いた作品が多く見受けられます。三上はシュルレアリスムに深く関心を寄せた時期があるほか、自身の肺結核をはじめ長い闘病生活を通して人体に対する強い興味が生まれたことが、このような作品を制作するきっかけとなったと考えられています。一方で、人体を機械部品のように捉えて表現する手法は当館の所蔵作品である河原温《カム・オン・マイ・ハウス》にも見られます。いずれの作品も1950年代に制作されており、アーティストが当時の社会や人間のあり様をどのような視点で捉え、表現しようと構想していたかを考えるヒントになりそうです。(3)

竹内 孝和(たけうち たかかず／1961－)
1961年三重県生まれ。86年愛知県立芸術大学美術学部彫刻専攻卒業。88年同大学院美術研究科修了。91年にドイツ、デュッセルドルフ美術大学に留学。98年にクラウス・リンケ教授よりマイスターシューラーを取得。現在、愛知県立芸術大学彫刻専攻准教授。
竹内は、長くドイツと日本の両方に拠点を置いていたこともあり、海外での発表も多く地元で作品を見る機会はそれほど多くはないのだが、このほど名古屋で開催された個展で作品を見ることができた。
「古代の私はよく見えたーPrimitive man, I can see better.」と題された展覧会に足を運ぶと、画廊のホワイต์・キューブの中に土や大きな木が持ち込まれ、野生の世界(!?)とおぼしき外の世界がインスタレーションされていた。といっても、竹内はインスタレーションという言葉を使わない。あくまでも自身は彫刻家であるという意識を持っているのだろう。ある景色、ある場面、あるいはある一つの舞台を作るように、空間を彫刻する「状景彫刻」だと言う。確かに、展示されていたのは、まさにある場面を切り取られたかのような「状景」であった。斧で切られた木が切り倒されたその瞬間が再現され、壁には生々しく木が倒れた時の衝撃まで残されている。キラリと光るガラスで作られた斧の先が、とても印象的だった。この木を切り倒していた人が、その瞬間に、雷にでも打たれたような衝撃を受けた、そういう場面を連想した。
竹内は、人が言葉を修得することで得られ

協力会通信

「寄附のお願い」

名古屋市美術館は3年後の平成30年に開館30周年を迎えます。開館前の準備室の段階から勤務している筆者としては「もう30年か」「本当にあつという間だった」と感慨もひとしおですが、皆様ご存知の通り、開館した1988年はバブル景気の真っ最中で、どこへ行っても、誰に会っても、浮かれたような気分で溢れかえておりました。あれから幾歳月、まさか日本がこれほど長く沈滞した状況にとどまると予想した人はいないでしょう。日本が沈滞するということは、当然美術館の活動も沈滞するということで、当館に限らず、いつこの美術館も過去十数年間、大変苦しい状況を強いられております。乾いたタオルを尚絞るような予算カットの連続に、青息吐息の日々が続いています。中でも深刻なのが作品の収集です。展覧会や教育普及など、集客と直結するような事業の予算については、削減額も限度がありますが、作品の収集は日々の美術館活動に即座に影響を与えるものではない、との判断からか、最も大幅な削減の対象になっています。もちろん作品の収集は、購入だけではな

イベントガイド

■**画家たちと戦争：彼らはいかにして生きぬいたのか**
戦後70年の節目を迎え、激動の時代を経験した画家たちが描いた、戦前・戦中・戦後の各時期における作品を一堂に展示し、作品の変遷を展望することで、彼らが戦争を「いかにして生きぬいたのか」を検証する展覧会。横山大観、藤田嗣治始め14名の画家が描いた作品129点を紹介します。
会期：7月18日(出)～9月23日(水・祝)
前期・後期で一部展示替えあり。
料金：一般1,300円・高大生800円・中学生以下無料
■**リパブル国立美術館所蔵英国の夢 ラファエル前派展**
「ラファエル前派」は、19世紀半ばのイギリスで「自然に忠実に」をモットーに、ルネサンスの巨匠ラファエロ以前の美術を理想とし、それまでのイギリス画壇を支配してきたアカデミックな絵画とは異なった、豊かな物語性を孕み、想像力を喚起するような新しい絵画世界を創造しました。この運動は後の作家たちに大きな影響を与え、象徴主義の潮流を形成していくこととなります。本展では、リパブル国立美術館の所蔵品から、ラファエル前派

た物事を認識する能力と同時に失ってしまった感覚、別の認識能力があったのではないかということ意識しているという。以前にも、ものが言葉や概念を獲得することで、あたかも実体があるように存在していくことに関して、その象徴としてのシャボン玉に映る世界を主題とした竹内の作品を見せてもらったことがある。ふりそそぐ多大な情報の雨の中でイメージと実体が曖昧な世界に生きる私たちが、見たり、感じたりできなくなってしまった確かなものを古代の人はそのキラキラした澄んだ瞳に映しだしていたのだろうか。ガラスの斧には、「Primitive man, I get it」と書かれていた。常に物の実体と対峙する彫刻家ならではの視点で、現代社会とそれが生み出す感覚に疑問を呈しているのだと思う。(hina)



竹内孝和《古代の私はよく見えたーPrimitive man, I can see better.》2015年
LAD GALLERY 2015年6月22日～7月20日

く寄贈や寄託といった方法によるコレクションの充実もあり、実際過去10年ほどの収集作品の大半は寄贈によるものなのですが、美術館がより主体的にコレクションを作り上げていこうとすれば、それなりの経費が発生するのは避けられません。確かに短期的に見れば美術館活動に目立った影響を与えることはないかもしれませんが、長期的にはボディ・ブローのように回復不能な大きなダメージをもたらすことは間違いありません。コレクションは美術館活動の根幹であり、その質と量によって美術館の評価が決定することは、世界各地の著名な美術館を見ればすぐに分かります。
そこでこの閉塞した状況を打破し、開館30周年を目指して魅力的な作品を収集するために、市民の皆様方に購入基金へのご寄附をお願いしたいと思います。税金で運営をさせていただき、さらにその上にご寄附をお願いするのは大変心苦しいのですが、名古屋市美術館のコレクションをより魅力的なものにするために、是非とも皆様方のご協力をお願いいたします。具体的な寄附の方法につきましては美術館のホームページをご覧ください。直接電話で美術館にお問い合わせください。ふるさと納税制度の対象となる寄附金で、税金控除を受けていただくことも可能です。なにとぞご理解、ご協力のほど、よろしく願います。(F)

の作品をはじめとするこの流れにある作家たちの代表作約70点を紹介します。
会期：10月3日(出)～12月13日(日)
料金：一般1,400円・高大生900円・中学生以下無料
■**常設展**
○**名品コレクション展 I (後期)**
名古屋市美術館のコレクションから厳選した作品を紹介します。
会期：7月18日(出)～9月23日(水・祝)
エコール・ド・パリ：前衛から古典へ～第一次世界大戦がもたらしたもの～
メキシコ・ルネサンス：ディエゴ・リベラ
現代の美術：浮遊感覚
郷土の美術：近くを見つめる一名古屋の風景
■**コレクション解析学**
○**第2回※2F講堂・無料・先着180名**
日時：8月23日(日)午後2時～
演題：「作品が生まれる場＝アトリエについて―ブランクーシからキーファーまで」
講師：竹葉丈(名古屋市美術館学芸員)
作品：コンスタンティン・ブランクーシ《うぶごえ》1917(1984)年

休館日は月曜(祝休日の場合は翌日)、9月24日(木)～10月2日(金)、10月13日(火)、11月24日(火)です。詳しくは、美術館HP
<http://www.art-museum.city.nagoya.jp>をご覧ください。(KT)

展評

2015年 7 月11日(土)～9 月27日(日)
三重県立美術館

『20世紀日本美術再見・1940年代』

この夏、“戦後70年”にまつわる展覧会が各地で開催された。この地方でも、7月11日に愛知県庁大津橋分室に『愛知・名古屋 戦争に関する資料館』が開館し、当館で『画家たちと戦争―彼らはいかにして生きぬいたのか』(～9.23)を開催したほか、三重県立美術館では『20世紀日本美術再見・1940年代』、岐阜県美術館における『日韓近代美術家のまなざし―「朝鮮」で描く』(～8.23)、さらに東に向かえば、IZU PHOTO MUSEUMでは、戦時下の写真資料満載の『戦争と平和―伝えたかった日本』(静岡県長泉町、～2016. 1. 31)

展評

2015年 2 月28日(土)～6 月28日(日)
ベルギー王立美術館

シャガールとマグリット

このところ、常設展で不在だったシャガールの《二重肖像》は、昨年秋から今年の6月末にかけてミラノとブリュッセルの二都市を巡回するシャガールの回顧展に出品していました。展覧会の会期終了に合わせ、作品の引き取りのためにベルギー王立美術館に伺い、撤収の前日展覧会を鑑賞しました。最終日とあってたくさんのお客さんで賑わっていて、初期から晩年までの200点以上の作品で構成された今回の展覧会は、トータルで約13万人の入場者を誇る大成功を収められたとのこと、最後の4日間は急遽夜9時まで開館時間を延長されたそうです。

展覧会は、テーマとして特にユダヤ人の文化や精神性との関係性にスポットを当てたもので、若き日のシャガール自身と妻ベラが描かれた当館の作品《二重肖像》は、永遠の愛がうたわれ、妻ベラの肖像をモチーフとした若き時代の代表作として、『カーネーションを持つベラ』と並べられていました。当館の作品は減多に貸し出すことがないのですが、今回のように大きな回顧展の中で見ると、作家の描き方やモチーフの変遷がよくわかり、作品の構成要素のひとつひとつが作家と関わりが深いものであったであろうことに改めて気付かされます。他の作品との関連から、普段はあまり意識しない背景にぼんやり描かれている丸い形が月のように、あるいは別の作品の柱時計の形の一部のように見えたり、さらに、別の黒い手袋が描かれている作品との関連から、ベラの黒い手のひらはその手袋をは

BOOK

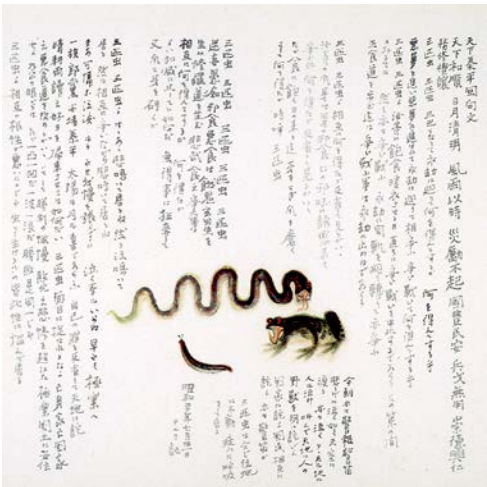
『深呼吸の必要』

長田弘著、晶文社、1984年

美術館に就職して間もない頃、題名に惹かれるがまま内容も何も知らず映画を観たことがありました。後日その監督がある詩集に因んで題名を付したと知り、本屋で探したのが今回紹介する『深呼吸の必要』です。今年のゴールデンウィーク明けに著者である長田弘氏の訃報を受け、久々に本棚から出して読み返しました。

平易な言葉や散文詩の形式による読みやすさから児童向け詩集と評されることが多い作品ですが、こどもから大人になる時の境目を探る詩「あのときだったかもしれない」は、これまで過ごした時間を丁寧に思い返し、情景を頭に浮かべながら、自分が大人になったのはいつ、どの瞬間だっただろうかと、読み手にやさしく問いかけてきます。

大人はその瞬間から“遠く”離れ、二度と戻れない場所まで来ていると筆者は言及しますが、境界をいとも容易に乗り越え、かつ自分の世界へも戻ることのできることもは、大人とは確かに別の生き物です。昨年末に開催していた特別展「ゴー・ビトゥイーンズ：こど



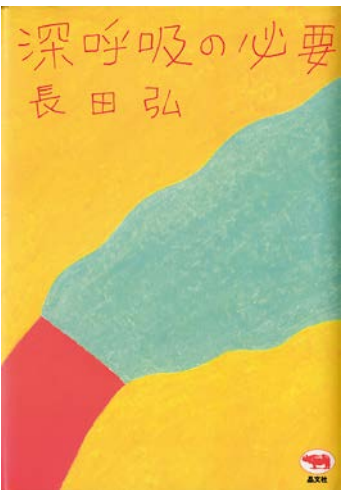
秦テルヲ 《戦中絵日記》昭和20年 7 月31日

が開催されている。20世紀前半のモダニズムの展開を、植民地であった朝鮮半島、「前線」



めているように見えてきたりしました。展覧会への出品は、実際に作品を比較することができるという意味で重要な機会なのだと改めて実感しました。

ところで、ベルギー王立美術館は、古い時代から現代までのベルギーの美術を紹介していますが、マグリット美術館も内蔵しています。ベルギーを代表する作家マグリットを紹介する美術館だけあって、作品だけではなく様々な資料や各章ごとに分かりやすい説明を加えた映像も見所で、13年前に当館で「マグリット展」が開催されたときに出品されていた懐かしい作品たちとともに、当時作品とともに来名した学芸員の方にも再会できたのは嬉しいことでした。ただ、作品は変わらずとも私たちは確実に年を重ねていたことにも気付かされてしまいました…。(hina)



もを通して見る世界』では異世界のさまざまな境界を自由に行き来する存在としてのこどもの特性に着目しましたが、本書の指摘とも共通しています。境界の在り処を見極めることは、大人とこどもの差異を正しく認め、かつて自分がこどもとして生きていたことを認めると同時に、今の立場でどう生きるかを見つめ直すことであり、世代を問わず多くの人々と共有できる主題です。内なる自分と静かに向き合うときや、身近なこどもとの接し方を見つめ直すとき、私たちが忘れがちな大切な視点を提示するとともに寄り添ってくれる一冊です。(3)

※長田弘氏は2015年5月3日に逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

と「銃後」の表現、沖縄、ヒロシマ・ナガサキ、そして終戦とその表象について、かつてない規模と多様な視点で振り返り、検証することができた。なかでも、三重県立美術館が企画、開催した「1940年代展」は、敗戦の年1945年を挟んだ前後十年に展開された造型表現について、絵画はもとより彫刻、工芸、写真、建築の各表現について検証を加える初めての取り組みであった。

展示された作品のなかで最も印象的だったのが、戦争末期の家族のスナップと絵日記であった。東京朝日新聞社のカメラマンとして、戦地に赴き、数々のスクープをものにした影山光洋(1907―1981)が撮影した《灯火管制》

展評

2015年 4 月25日(土)～8 月30日(日)
ヤマザキ マザック美術館

「世界に挑んだ明治の美
宮川香山とアール・ヌーヴォー」

日本に西洋化の波が押し寄せた幕末から明治にかけて、政府は工芸の輸出を奨励し、多くの職人が、日本ならではの緻密な職人技を駆使した作品をもって、西欧に挑むことになった。その一人が宮川香山であり、彼の高浮彫の技術は、世界を驚嘆させたといわれる。この展覧会は、そんな宮川香山の作品を紹介しながら、エミール・ガレやルネ・ラリックといったアール・ヌーヴォーのガラス作家たちの作品も展示しており、両者を対比しながら東洋と西洋の工芸品の粋を堪能できる構成となっている。

宮川香山の作品は装飾的であるが、この展覧会を見て、その装飾性が決して過剰なものではなく、むしろ心地よいものであると感じられた。蟹や鳥や鼠といった生物の執拗ともいえる程のリアルさには、やはり驚嘆するほかないのだが、単に超絶技巧を見ている、というだけではなく、美しい作品として素直に楽しめるものがあったのである。

一緒に展示されていたエミール・ガレも、小さな生物をよく題材にしたが、やはりいかにも西洋風である。ガレの強い個性は、彼に

CULTURE, MOVIE, DRAMA&MUSIC

「にぎわう展覧会 東京」

この欄で展覧会について触れるのは反則かもしれませんが、展覧会そのものに関する批評ではなく、それを開催する文化的な土壌についての考察ということでお許し願いたいと思います。

5月末に一泊二日で東京方面へ出張する機会があり、仕事の合間を縫って4本の展覧会を見たのですが、その充実ぶりに改めて感心しました。東京にいくつの美術館があり、年間どれだけの展覧会を開催しているのか分かりませんが、間違いなく東京は世界でも有数の展覧会都市です。今回の出張でも、時間さえあれば、さらに見たいと思う展覧会が3～4本はありました。仕事から、パリ、ニューヨーク、ロンドンといった世界に名だたる美術館を擁する都市を訪問することもあります。これらの都市と比べても何ら遜色のない、あるいは凌駕するほどの規模と内容の展覧会を東京は常時開催しています。

もちろん数が多ければいいわけではなく、展覧会の内容が問題なのですが、今回見た4

と、大正期に女の性を退廃的に描きながら、やがて仏画制作へと移行していった“デカダンと光明の画家”秦テルヲ(1887―1945)の《戦中絵日記》は、“銃後の生活”という生活訓に収斂されることなく、「家族愛」に貫かれたその心情の告白は崇高にさえ映る。

同企画の優れたところは、表現の展開を1945年＝敗戦によって断絶されたものとしてではなく、連続したものとして捉え直そうとした点にある。そこには未だ検証すらされていない占領期の表現も含まれるだろう。従来 of 「大きな物語」(＝歴史主義)による文脈を見直し、モダニズムの検証が新たな段階に入ったことを同展覧会は表明している。(J.T.)



宮川香山《琅玕釉蟹付花瓶》明治一大正
山本博士蔵(宮川香山 真慕ミュージアム保管)

しか出来ない造形美を生み出しているが、香山の方は、あくまでも日本人らしく、日本人にしか出来ないものを作り出す。西洋に追いつけ追い越せという時代であったが、どんなにそう思っても、日本人はやはり日本人なのだ と、妙に納得させられるものがある。

極めて装飾性の高い作品を次々に作った香山であるが、晩年には、大変シンプルな作品を制作している。殆んど装飾もないつくりとした花瓶の縁に一匹の小さな蟹がよじ登っている作品《琅玕釉蟹付花瓶》では、小さな蟹のリアルな造形にも感心するが、釉薬の色の美しさや、花瓶のシンプルさとこの写実の取り合わせの妙に、惹きつけられる。晩年になって海の風のような平静な心境を得た人物のように、香山もまた、何らかの静かな境地に達したのではないだろうか。現代の眼から見ても古びていない、モダンな作品である。(AN)

本はいずれも極めて充実していました。その4本とは六本木の新国立美術館で開催されていた「ルーヴル美術館展」と「マグリット展」、文化村ザ・ミュージアムの「ボッティチェリとルネサンス展」、そして国立西洋美術館の「グエルチーノ展」です。展評ではないので詳細には触れませんが、規模も作品の質・構成も、欧米の著名美術館で開催されているものと全く遜色ありません。とりわけイタリアのルネサンスやバロックを紹介する後者2本は、作品の質、脆弱さ、物量などを考えると、「なぜ、こんな作品を日本で展示できるのか?」と、同業者として疑問を抱くほどの充実ぶりでした。

ご多分に漏れず、美術業界もバブルの崩壊以後大変厳しい状況に晒されており、私立美術館の閉鎖や老舗画廊の店じまいなど、暗い話題には事欠きません。しかるに、展覧会活動だけは不景気もどこ吹く風と、依然として活発な状態が続いています。このような状況を、商業主義による歪みと捉える向きもあるかもしれませんが、私としては残された希望と解釈したいと思います。イタリア関連の2本のように、必ずしも観客動員が見込めるところに未来への可能性を信じたいと思います。(F)

【編集後記】
「アートバーバー」99号をお届けします。
先日、原稿が未だ集まっていない段階での会議の席上、本紙次号について、企画の話が持ち上がりました。開館以来、刊行してきました本紙「アートバーバー」も、本年12月1日発行予定の次号で100号を迎えます。開館の翌年1989年1月に創刊、当初は年4回の季刊として刊行しておりました。世紀が変わった2001年4月1日発行の49号からA2二つ折り四面に改訂、その後、記事内容やタイトルのマイナー・チェンジを行い、現行のフォーマットに落ち着いたものでした。
予算の削減により、“名品コレクション展”(常設展)の解説しおりやリストが内部での印刷となり、また、かつて特別展とは別に開催していた講演会の開催が不可能となるなかで、本紙も季刊から年3回の刊行に縮小せざるを得ない状況を経てなお、内容や読み応えはともかくも、100号まで続いたことは、素直な驚きであり、喜ぶべきことかもしれません。限られた予算や時間の制約の中で、実現できなかった企画や執筆・紹介できなかった作品論を、同紙の“取って置き”の話題のために、取材や調査を行なったことは、学芸(員)力の養成につながったかもしれません。
次回100号記念については、各執筆者が本号の執筆・締め切りを優先・専念したためか、現在のところ、企画内容について全く決まっていません。(J.T.)

アートバーバー第99号 発行日：2015年8月1日
発行 名古屋市美術館
[芸術と科学の杜・白川公園内]
http://www.art-museum.city.nagoya.jp/
〒460-0008
名古屋市中区栄二丁目17番25号
地下鉄(伏見駅・大須観音駅・矢場町駅)下車
Tel.052-212-0001 Fax.052-212-0005
休館日：毎週月曜(祝日の場合は直後の平日)
開館時間：午前9時30分～午後5時
祝日を除く金曜日は午後8時まで
※入場は開館の30分前まで

Nagoya City Art Museum